

毎年、お盆の頃、わが家に宅配便で大きな段ボール箱が届く。送り主の名前を見ると、田舎の従姉からである。「品名」の欄には、「トウモロコシ」とある……。そうならたら急がねばならない。それが仕事で忙しすぎるが、原稿の締め切り日だろうが「待ったなし」である。トウモロコシは新鮮なうちに蒸さないで、甘みがなくなってしまうのだ。

「あ……」
このひんやりと澄んだ空気には覚えがある。子供の頃、私は夏休みを岩手の田舎で過ごした。田舎の夏は最高だった。年の近い従姉と、一緒に川でカジカをとったり、捕虫網を稲の穂先で泳がせてトンボをつかまえたり、夜は蛍狩りに行って、小さな光を蚊帳の中に放して眠った。

Taste
of
the Season vol.17
text by Noriko Morishita
illustration by Mizue Hirano

トウモロコシは「待ったなし」

エッセイスト 森下典子

が覚めるのだ。もそもそ起きだして居間に行くと、もうストーブが炊かれていた。思わずそのそばに座った。

ストーブの脇には、朝、収穫したばかりのトウモロコシが山積みになされていて、祖母と叔父がその皮を黙々と剥いていた。急に寒くなった朝は、みんな口が重い。

「もう、お盆だ」
祖母が、ぼそつと言った。急に寂しくなった。それは私に、横浜に帰る日が近いことや、夏休みも残り少ないこと、そして宿題がたくさん残っていることを思い出させた。

私が大人になって田舎へ行かなくなると、祖母はその朝収穫したトウモロコシを箱に入れて送ってくれるようになった。箱の中には「すぐに蒸して食べてください」

と、一筆書いてあった。その祖母もいなくなり、今は、昔一緒に遊んだ従姉が送ってくれる。段ボールの中には、皮の付いたままのトウモロコシと一緒に、「お盆」の朝の、ひんやりした空気が詰まっていた。

さて、トウモロコシの皮を剥く。ベリベリ、ベリベリ……。

薄緑色の何枚も重なった皮をひん剥くと、鮮やかな黄色い粒々が、まるで朝礼で並んだ小学生みたいに整列している。その行列の先端の、ふさふさとした縮れ髭もむしり取り、湯気の立つ蒸し器の中に、きれいに寝かせて並べ、蓋をする。……やがて、台所一杯に湯気が立ち込める。その湯気に薄甘い香りが混じって、すでに空気がおいしい。

蒸したての最初の一本を「田舎から来た初物です」と仏壇に供えて手を合わせ、それから、熱々のをハーモニカのように横に持って、フウフウ吹きながら齧る。黄色い粒々からほとぼしる熱い汁の、なんと瑞々しい甘さ！

もりしたのりこ／神奈川県生まれ。横浜市在住。日本女子大学文学部国文学科卒。『週刊朝日』の名物コラム「デキコトロジー」のライターを経て、エッセイストとなる。主な作品に、『日は好日』『猫といっしょにいるだけで』（新潮文庫）、『いとしいたべもの』（文春文庫）など。近著に『好日日記―季節のように生きる』（バルコ出版）、『こいしいたべもの』（文春文庫）がある。